



これからの学生ボランティアに期待すること

—至誠学園と慶應義塾大学ライチウス会の共に歩んだ65年—

ライチウス会勉強会

第2部 パネルディスカッション



《主催》慶應義塾大学ライチウス会

《後援》慶應義塾大学ライチウス三田会

○コーディネーター

佐藤 貢一氏

1973年（昭和48年）経済学部卒。東京都に福祉職として入庁。児童養護施設、児童自立支援施設、障害者施設、高齢者施設等に勤務。

東京都を退庁後、2010年（平成22年）より玉川大学教育学部乳幼児発達学科教授。児童家庭福祉、社会的養護等について教鞭をとるとともに、厚生省社会保障審議会児童部会専門委員会委員長を務める。地域福祉事業にも数多く関与

○パネラー

半田理恵子氏

言語聴覚士。1976年（昭和51年）文学部卒。銀行勤務後、国立身体障害者リハビリセンター学院聴能言語専門職員課程修了。

1981年（昭和56年）より世田谷区内の医療機関等において失語症・高次脳機能障害等の障害者への臨床を行う。地域の「かかりつけ言語聴覚士」を目指し、長期的視点で在宅支援を続けている。

2013年（平成25年）よりライチウス会先輩で作業療法士の藤原茂氏が主宰する高齢者介護施設「夢のみずうみ村新樹苑」施設長。東京都言語聴覚士会会長。

渡邊 新太氏

2002年（平成14年）法学部卒。至誠学園に児童指導員として入職。

2012年（平成24年）よりカンボジア児童養護事業の支援のため現地小学校、児童養護施設等と交流・研修に参加。現地教員の至誠学園受入れや至誠学園児童のカンボジア訪問等をコーディネート。2015年（平成27年）より至誠学園児童福祉研究所研究員。

西村綜太郎氏

経済学部4年

駒村康平（現ライチウス会会長）ゼミ 社会福祉専攻

ライチウス会至誠学園担当

コーディネーターあいさつ
——1973年(昭和48年)卒 佐藤 貢一

私、本日の進行を務めさせていただきます、1973年(昭和48年)卒玉川大学の佐藤と申します。どうぞよろしく申し上げます。

まず冒頭で私のほうから、このパネルディスカッションの趣旨と大まかな進行の流れをご説明させていただきたいと思ひます。

只今、高橋先生からのお話にもございました通り、長い歴史と伝統を誇るライチウス会も発足当初から、こんにちに至るまで時代の変遷をみまして、活動内容にも大きな変化を遂げてまいりました。しかし、その基軸はなんと申しましても至誠学園、そして学園の子どもたちとライチウス会の会員との65年間にも亘る、長い交流でございます。今回のパネルディスカッションでは、高橋先生のご講演を受けまして、3人のパネラーの方々に来ていただきました。

「ボランティア」というものを1つのキーワードとしまして、今後の学生ボランティアのあり方や学生に期待すること、更にはライチウス会の今後の歩みにも、皆様とご一緒に考えていきたいと思っております。よろしく申し上げます。

さて、まず3人のパネラーの方にご発言をいただきます。3人の発言が終わりました後、パネラー相互間での意見交換や相互質問、そして、会場の方々からもご質問やご意見等を賜りたいと思っておりますので、よろしくお願ひいたします。

発表1 「それはライチの活動からはじまった」

——1976年(昭和51年)卒 半田理恵子——

【パネラー紹介】コーディネーター

それでは、さっそくパネラーの発表に入りたいと思います。最初に、1976年(昭和51年)卒の半田理恵子さんから口火を切っていただきます。

半田さんは、私が4年生の時にライチウス会(略称「ライチ」)に入って来られました。半田さんにご登場いただきましたのは、半田さんがライチウス会在籍の頃から、至誠学園の活動に加えまして、障害関係の施設ですとか、今のように、多岐にわたる活動拠点での活動を展開されるようになってきました。いわば、サークルの歴史の中での分岐点的な時代に、4年間を過ごされた方であるからです。当時のライチウス会の状況や、それから、卒業後の半田さんの活動の軌跡も含めてお話をいただきたいと思います。



【発表】半田 理恵子

私は至誠学園のパートでずっと4年間活動しました。一度も勉強会を休んだことがないというのは、今でも誇りを持って伝えることができます。

もちろん至誠学園で勉強会を行いながら、子どもたちの問題を「地域福祉ってなんだろう、ボランティアってなんだろう」って考えながら、本当に真面目な学生だったなあって振り返る日々です。私は3年の時に代表をしました。おそらく、ライチウス会の中で初めての女性の代表だと思います。当時、ライチウス会の会長でした千種義人先生から研究室でライチウス会のことなどをいろいろお聞かせいただき、「はっ！」と大変驚いたことを覚えています。

私が代表の時に忘れられない出来事がありました。それは、私の自宅に東京善意銀行から様々なニーズの電話が来たことです。脳性麻痺の方の聞き取りにくいニーズも全部なんとか聞き取りながら、

こんなにも学生ボランティアを必要としている方たちがいるんだということを知り、これらのニーズをライチウス会の中だけで解決してはいけないと思いました。即座に文房具屋さんで模造紙とマジックをたくさん買ってきて、家で何枚も何枚も「ボランティア急募！何月何日どこどこでこういう活動がある。もし時間がある方はライチウス会の部室を訪ねて欲しい。」と書きまくって、翌朝、三田の校舎の掲示板に、どなたの許可も得ずに、大学の先生には叱られそうなのですが、貼りまくった、というようなことを思い出します。その結果、訪ねてくるライチウス会以外の仲間が次々と部室を訪ねてきてくださいました。その皆さんを登録させていただいて、ある意味では「ランティアビューロー」的な活動を開始しました。

また、私たちの世代から、至誠学園での活動に加え、世田谷更生館（社会福祉法人友愛十字会経営）での活動も始まりました。そういう意味では、コーディネーターの佐藤さんが言われたように、大きな分岐点を私達は作ったというようなことが言えるのではないかなと思います。

そういう私でありましたので、障害のある方々と出会い、リハビリテーションの世界に飛び込もうと大決意いたしました。

今は言語聴覚士という名称ですけども、まだ国家資格がなかった当時、厚生省が設立した、所沢の国立身体障害者リハビリテーションセンター学院の聴能言語専門職員養成課程に通い、卒業しました。言語聴覚士というのは、言葉によるコミュニケーションに問題のある方々に様々な支援を行っていく活動ですが、今では2万2千名を超える言語聴覚士が誕生しました。よく「ST」という略称で呼ばれます。私が主に脳卒中や脳外傷でなってしまう失語症とか、あるいは高次脳機能障害といった、大変回復に時間が必要とする方々に対するリハビリテーションを中心に、全て世田谷区にある医療機関で長く仕事をしてきました。

私が1981年（昭和56年）に学院を卒業した時には、「ST」という仕事をする先輩もなく、世田谷には誰一人そういう仕事をする人

はいませんでした。指導者もなく、たぶん目黒区にも大田区にも、そういう専門職は誰もいませんでした。学院を卒業する時に「君達がパイオニアになれ！」と激励され、なんとか頑張っ、地域のなかでこの仕事をどうやって責任をもって果たすか、ということに誠意を尽くしてきたように思います。

なぜ世田谷という地域に自分は34年間も身を置いてSTとして頑張ってきたのかということはおそらく、至誠学園で活動するなかで「地域福祉ってなんだろう」って思いながら考えていた、そのベースが私の行動を引き起こしたのかなあという風に思っています。

病院を退院した後に、患者さんは障害があるまま、どんな生活を送ることになっていくのか？私たちの支援は病院で終わっていいのか？そういった疑問がたくさん生まれました。

「受け皿がなければ地域に作ろう、地域を耕せ」というのが、かつて今もなお、私の心を奮い立たせる、自分が作った言葉です。病院に勤務しながら、保健所の活動とか、いろいろな障害のある方々の施設へ通いました。そこで、脳性麻痺の方の言語訓練を行ったり、今でいう、高次脳機能障害という方々への支援も続けました。

それから地域で、大きな、あるいは小さな、障害者の自主グループを作りました。「失語症友の会」という名称でありますけれども、これを決して障害者とそして家族だけで作るのではなく、地域のボランティアの方と一緒に作るからこそ意味があるということを実際に大事にしながら作りました。「ぜひ、ボランティアの方には障害者と地域社会との架け橋となって欲しい」と、ボランティアの役割を強く強く私が主張させていただいて、その役割を理解していただきました。



「花みずきの会」という失語症の会はもうすぐ設立から30周年も迎えます。当初よりずっと支援してくれる、同じボランティアの方々が今なおいらっしゃり、もう本当に70歳にもなられたボランテ

ィアの方と一緒に歩んできました。右の写真が「花みずきの会」の例会の写真です。

「花みずきの会」だけではなく、小さな失語症の友の会をいくつも作り、あるいは、右の写真は、とある失語症の若い女性を個別支援してくれるボランティアの方を地域で探して、支援して下さるある一つの風景です。出産を契機に脳出血になられ、失語症になられた女性を支援している、そんな姿を写真に撮らせていただきました。

玉川病院に勤務していた当時、リハビリチームみんなで、長期にわたる支援を一冊の本にまとめました。また、地域の様々な他職種の皆さんと一緒に全国地域リハビリテーション研究会や全国大会を組織して、いろいろなことをたくさん発信してきました。

そして、私の記憶に残るのは、病院で10年ほど勤めた頃、イギリスへ研修に行かせていただいた時のことです。研修中、ケンブリッジの診療所で仕事をされる方々と出会いました。どのように、診療所が核となりながら、多くの病気の方々や障害がある方々を支援しているか、という現場を見させていただく中で、あるリハビリテーション病院の女医さんが「高齢化は政治家にとっては問題なんだけど、我々にとっては挑戦なんだ」という言葉をおっしゃっていたのです。それがとても忘れられません。



以降、世田谷区内を一人で自転車で駆け巡りながら、訪問リハビリの世界に入りました。在宅支援がとても大事だと痛感したからです。雨の日も寒い日も、本当に夏の暑い日も、自転車をこぎながら、1日20キロはこいだかもしれません。でも、どんなに大変でも、訪問を待っている皆さんのところへ訪ねて行きました。右の写真は



ある雑誌で紹介された記事の一部です。

1998年（平成10年）、言語聴覚士はようやく国家資格化されて、2004年（平成16年）には言語聴覚士による訪問リハビリテーションの制度化を実現させることができました。

そして、2年前に医療の世界を離れ、介護の世界へ入ることになりましたが、去年（2014年〈平成26年〉）の思い出は、第15回日本言語聴覚学会を学会長として東京都言語聴覚士会などの多くの仲間と一緒に開催することができたこと、それから、もう一つ、3年くらい支援した、とある国立大学の経済学部博士課程後期に在籍する青年から思いがけないプレゼントをいただいたことです。この青年は交通事故にあって脳挫傷を負い、高次脳機能障害になりました。ある意味では軽いと思われる障害かもしれませんが、彼にとっては大変重い障害でした。その支援を続けた結果、去年の12月にようやく経済に関する博士論文を仕上げました。その博士論文のとある部分に、私への感謝の言葉として、英語で「脳損傷から彼女は私を救ってくれた」と書き添えてくださっていました、これが医療の現場を離れる私への最後のプレゼントでした。このように、私は本当に心残すことなく、介護の世界へ突入することができました。

ライチウス会の先輩で、経済学部を中退した藤原茂さんという人がいます。彼が主宰する「夢のみずうみ村」の施設（新樹苑）が世田谷にできまして、今、そこの施設長を務めています。大変ユニークな施設です。「夢のみずうみ村」そのものは、いろいろマスコミでも紹介されていますので、お話は省かせていただきます。今は日々、ここで施設長として、そして、言語聴覚士として仕事をしながら、在宅支援を行っている日々です。

《発表に使用したスライド（一部）》

それはライチの活動から はじめた

半田理恵子
(1976年 文学部卒業)

• 学園の子供たち
との勉強会

• 様々な障害ある
方々との出会い

• ボランティア
ビューローとしての
役割



昭和56年3月
国立身体障害者
リハビリテーションセンター学院
聴能言語専門職員養成課程 卒業

言語聴覚士とは

- ことばによるコミュニケーションに問題がある方に専門的サービスを提供し、自分らしい生活を構築できるよう支援する専門職
- 摂食嚥下の問題にも専門的に対応

- **失語症**：脳卒中・頭部外傷などの後遺症として、話す、聴く、読む、書く、計算することなどが難しくなる
- **構音障害**：発音がはっきりしないなど、ことばが不明瞭になる
- **音声障害**：声が小さくなる、声かすれるなど、声に問題がある
- **言語発達障害**：同じ年齢の子どもに比べて、ことばの発達に障害がみられる状態
- **聴覚障害**：ことばが聞こえない・聞こえにくいのために、コミュニケーションに支障がある。ことばの発達に影響することもある
- その他：吃音、高次脳機能障害、認知症など

- 1981年3月 国立身体障害者リハビリテーションセンター学院 聴能言語専門職員養成課程卒業
- 1981年4月 日産厚生会玉川病院リハビリテーション科開設時、入籍 (東京都世田谷区) *地域への支援
- 1990年4月 区衛生部が関係する事業に非常勤STとして協力開始 *1999年3月まで、10年勤務
- 1998年3月 日産厚生会玉川病院 退職
- 1998年4月 医療法人財団新誠会 入籍
- 同年 9月 同法人 板倉町リハビリテーションクリニック開設
- 2004年4月 同法人 在宅リハビリテーションセンター成城 開設
- 2010年 秋 医療法人社団 厚生会と法人統合 在宅リハセンター成城 (地域支援型チームマネジャー)

<p>「無いもの尽くし」の時代 世田谷区に「ST」、私ただ一人 職場に先輩 なし 国家資格 なし 「ST」の知名度 ??? 専門分野のテキスト 不十分 コピー機 ようやく登場 (育児休暇制度の法律 なし)</p>	<p>世田谷という地域にこだわり、 言語聴覚士として この地域で何をなすべきか 常に考えてきた30余年間だった。</p>
---	---

<p>退院後、患者さんはどのような生活を 送ることになるのだろうか。</p> <p>私たちの支援は 病院で終了にしていいのだろうか。</p>	<p>「無ければ創ろう」</p> <p>「地域を耕せ」</p>
--	---------------------------------

<p><u>毎週木曜日の午後、地域支援活動の日となる。</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・2か所の保健所のリハビリ教室および 「言葉のリハビリ教室」への協力 ・岡本福祉作業ホーム(都立光明養護学校 卒業生のための通所訓練施設として開設) ～特に脳性まひ者への訓練・指導 ・岡本福祉作業ホーム玉堤分場への協力 ～高次脳機能障害者を中心とした通所施設 	<p>「失語症友の会」の設立</p> <ul style="list-style-type: none"> ・当事者、家族そして地域のボランティア の方々と共に。 ・ボランティアは、障害者と地域社会との 「架け橋」となってほしいと、その役割 を理解してもらう。
---	---


失語症友の会
「花みずきの会」

- ・月に1回の例会
- ・ニュースの発行
- ・年に1回のバス旅行
- ・時には夜の会も。。



リハビリチーム
皆で著した本

長期間にわたる
リハビリチーム
の支援により
改善する事例を
報告




第15回全国地域リハビリテーション研究会
抄録

「さあ、始めよう！」
いよいよ在宅医療の時代です

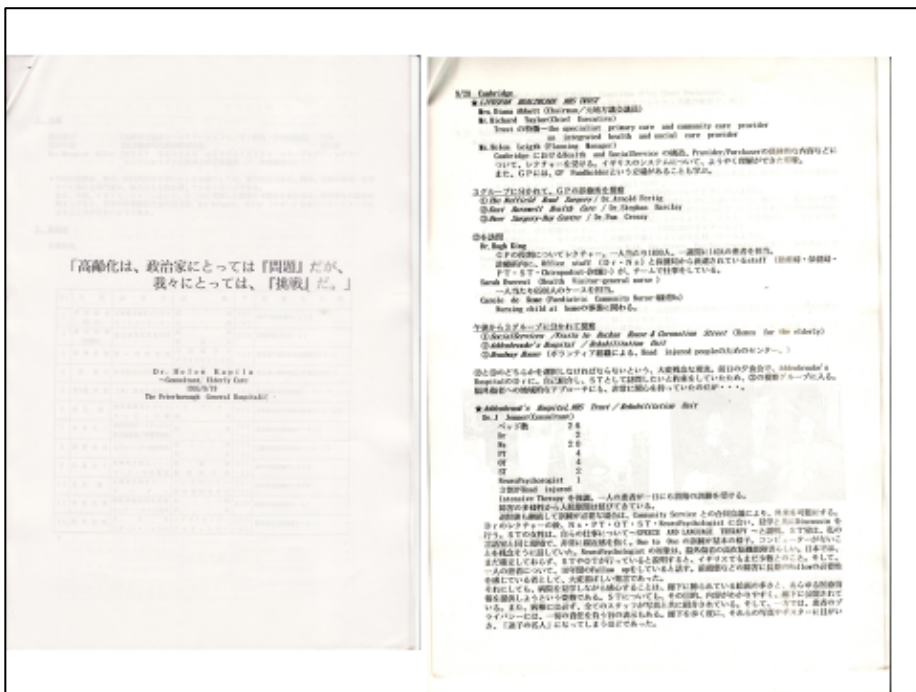
発行所：19000007100-0000
発行：徳 誠堂 医療福祉出版部 発行所

第15回 全国地域リハビリテーション研究会 抄録

編集：徳 誠堂 医療福祉出版部
発行：徳 誠堂 医療福祉出版部
〒100-0001 東京都千代田区千代田1-1-1
TEL: 03-5561-1111 FAX: 03-5561-0000

徳 誠堂 出版部





世田谷区内を自転車で駆け巡り
学んだ、「在宅支援」の必要性



平成10年
ようやく誕生した「言語聴覚士」
としての国家資格

平成16年
ようやく勝ち取った「訪問言語聴覚士」
という活動



In addition, a special mention goes to
Rieko Handa, a super speech therapist.
She saved me from brain disorder with
Extraordinary effort.

医療現場、最後の担当患者さん
から、書き上げられた博士論文
の謝辞の中で、いただいた言葉。

(2014年12月)

私の方こそ、ありがとう！！



そして、今、還暦を越え、

夢のみずうみ村新樹苑
(世田谷区八幡山)
施設長を勤めながら、
新たな在宅支援の場で学ぶ日々である。

**発表 2 「この子らと共に
—地域、アジアに開かれた施設をめざして」
——2002 年(平成 14 年)卒 渡邊 新太——**



【パネラー紹介】コーディネーター

次に、2002 年(平成 14 年)卒の渡邊新太さんにお問い合わせをいたしましたと思います。渡邊さんはライチウス会での活動を経まして、至誠学園に就職をされ、現在は至誠学園の児童福祉研究所の研究員でいらっしゃいます。私の時代にも、さきほど名前の出ました藤原さんとか、至誠学園に住みこみのような状態で指導的な仕事をしながら、学園から大学に通うような会員もいました。渡邊さんにはライチウス会のOBであり、なおかつ、今、至誠学園の現役の職員でもあるという立場から、お話をいただきたいと存じます。

昨日、至誠学園がカンボジアで行っている現地活動からご帰国なされたばかりで、まだお疲れだと思いますが、よろしく願いいたします。

【発表】渡邊 新太

今、私はカンボジアの現地活動に関わっていますので、自分の体験も含めてお話させていただきます。

私がライチウス会に入ったのは大学 1 年生の 11 月から 12 月の頃で、他の人より少し遅い時期でした。「子どもたちと関わりたい」という気持ちがあって入りました。当時は子どもと関わる施設は大きなところで新日本学園と福田会と至誠学園という 3 つでしたが、入った時期が大分遅かったせいで、日吉から近い新日本学園パートと福田会パートはすでにペアを組む子どもが全て決まっておき、「もう至誠学園しか行く場所がないよ」と言われ、至誠学園に通うことになりました。

しかし、大学時代至誠学園に通ったことは自分としてもとても楽しく、また非常に良い経験で、自分の大学時代はすなわち至誠学園での生活だった、というくらいに思っていました。

至誠学園では本当に子どもたちにも、職員の皆さんにもお世話になりましたので、大学卒業後は今度は自分が職員となって働いて恩返しをしたい、もっと子どもたちと一緒に生活をしていきたいという気持ちがあったのですが、「ちゃんと企業に出なさいよ」という周りの薦めもあり、一度、企業に就職しました。

ただ、なかなか学園への想いを捨てられず、企業に就職した年の夏、夏休みを利用して、学園の子どもたちの臨海行事に遊びに行かせてもらいました。その時に、学園長（当時）の高橋利一さんから声をかけてもらったのをきっかけとして、企業を退社し、至誠学園の職員になりました。

それ以来、学園で約12年勤務をしています。学園では、至誠学園の本園、グループホーム、地域小規模児童養護施設などの他、児童館や立川市・日野市からの委託でショートステイ事業も担当しました。ショートステイ事業と言うのは、出産であるとか、ノイローゼ気味になってしまった親御さんから子どもを1週間程度お預かりする事業なのですが、そういったことも含め、比較的地域と関わる役割を担当することが多かったです。地域との関わりが増えていったきっかけというのは、私が至誠学園に入職して最初の頃、小学校低学年の男の子を担当していました。その子は授業中に立ち歩いてしまったり、友達とのケンカが多かったりといろいろと学校でトラブルになってしまうことがあったため、本人からはなるべくよく学校の話聞いてあげるようにしていました。その話の中で、たとえば「〇〇ちゃんと遊びに行ってくる」と言われた時にその子がどういった子なのか、あるいは「〇〇公園に行ってくるね」と言われた時にそれがどこにあるのか、全然、わからなかったのです。

たしかに保護者会や学校公開など、職員が学校を訪問する機会がいろいろありますが、その際には職員同士で固まってしまう傾向が

あります。例えば、私はその子の担当として保護者会に行った時、周りのお母さんたち（出席者のほとんどはお母さんです）は、幼稚園から一緒だったりして、いろいろなところで繋がっていますので、自然と輪ができています。一方、私たち職員は職場を異動したり、同じホームでも子どもの担当替えがあるため、なかなか知り合いがおらず、居心地の悪さを感じていました。また、子どもたちも地域の家庭の子どもたちと遊ぶよりも、至誠学園の子どもたち同士で遊んだ方が居場所も近いですし、気心も知れている、ということで、なかなか地域に出ていかない傾向があります。

どうしてもこうした傾向になりがちなので、至誠学園ではガーデンパーティやバザーを毎年開催し、地域の皆さんに開かれた施設を目指しています。私も努力していこうと思い、PTAの役員に手をあげさせてもらいました。その結果、私自身が学校に行く機会が増え、子どもの様子をたくさん知ることができたり、学校の先生や保護者の皆さんともコミュニケーションが取れるようになりました。

それから10年ちょっと勤めていますが、学園の中でもいろいろな形で地域に出ていたり、学校や地域の役割を任せられることが多くなりました。私のこうした活動や思いが学園に認めてもらえたのかなあと感じています。

地域に出て行って気づいたことがあります。学園の子どもたちは非常に厳しい子ども時代を過している子がほとんどですが、地域の中や学校に行ってみると、学園の子どもたちよりと同じくらい大変なケースに置かれている子どもたちがたくさんいることに気がきました。親御さん、子ども自身も、どこに助けを求めていったらいいのか分からない方が非常に多いのです。

そこで、至誠学園が地域をもっと大切にし、自分からいろいろと発信して、近隣のみなを巻き込みながら、子どもをめぐる問題の解決や地域福祉の啓発に努めていければと感じております。

次に、私が職員としてライチウス会に対して思っていることも少しお話をさせていただきたいと思います。先程お話ししましたとおり、

学園ではガーデンパーティであるとか、バザーであるとか様々な行事や活動に、非常に多くのボランティアの方々が関わってくださっています。本当に10年、20年と、ライチウス会ほどではないとしても長期に関わってくださるボランティアの団体の方々もいらっしゃいます。大学生では福祉系の大学である程度専門性を持って関わろうとくださる方が多いです。それに対して、ライチウス会の皆さんはもちろん福祉を専門的に学んでいるわけではありませので、専門性という点では劣る部分があるかもしれません。OBとして言わせてもらおうと「ちょっとそれでいいの？」と思うことも時々あります。ただ、いろいろな経験をされているという面では、他の学生さんよりもライチウス会の皆さんの方が優れた部分があると思います。施設の職員もそうなのですけれども、いろいろな経験を子どもたちに伝えていくというのはすごく大切なことです。どうしても社会経験が不足しがちな子どもたちが多いので、自分の体験を自分の言葉で子どもたちに伝えてもらえる、というところではライチウス会の皆さんはすごく大きないいところ、伝えられるものを持っているのではないかと考えています。

大学生が学園とボランティアとして関わっていける期間はふつう4年ですね。私はその学生時代を含め職員になって10数年。子どもたちを非常に長い目で見られたということはとても楽しいし、嬉しいことだと思います。私が勉強会で担当していた子は、始めた当時小学4年生くらいでしたから、今はもう27歳くらいになっています。一時期連絡が途絶えたこともありましたが、今年(2015年〈平成27年〉)の夏、久々に関係が復活しまして、一緒に野球を見に行ったり、彼が勤めるスーパーへ様子を見に行ったり、一緒にご飯を食べに行ったりしました。大学を卒業すると、ライチウス会の学生と至誠学園の子どもという関係は終わってしまうかもしれませんが、その後は人と人という関係を保ち、ずっと、その子どもたちを支えられる大人・お兄さんという役割でいていただけたらいいかなあと考えています。

最後に、現在、私が携わっているカンボジアでの活動のこともお話しさせていただきたいと思います。それは、私が至誠学園元職員の長谷川ご夫妻の活動に触れたことをきっかけに始まりました。ご夫妻は、かつてカンボジアを訪れた際にその暮らしや教育環境の貧しさを目の当たりにし、2006年（平成18年）にカンボジアのシェムリアップ近郊に小学校の校舎を建設し、寄贈しました。その後、NPO法人「アジアの子どもたちの就学を支援する会（ASAP）」を設立、校舎の建設と学校運営のための支援を継続的に行ったり、学校に通う子どもたちの母親たちに縫製の仕事を提供、その製品を日本で販売する「マザーto マザー」という活動をして子どもたちが学校で学べる環境づくりにも力を注いでいます。

2012年（平成24年）5月より約10か月間、学園の仕事を休職して、シェムリアップでの現地ボランティアとしてASAPの活動をお手伝いしてきました。そして現在は、カンボジアに児童養護施設を設立することを目指して準備中で



現地の児童養護施設の子どもたち。
渡邊氏も支援

す。カンボジアは、貧困問題は深刻ですが、その一方で人々の純粋で陽気で優しいところは全く失われていません。いつか学園で生活している子どもたちとカンボジアの子どもたちが相互に訪問しあう交流の夢を抱いています。



子どもたちにお好み焼きをごちそう
（一番左 渡邊氏）

2014年（平成26年）8月には、至誠学園の職員と私がASAPのカンボジア・シェムリアップ訪問に同行し、現地の小学校や孤児院を視察してきました。また、2015年（平成27年）1月にも現地視察の職員研修を、そして同年夏には学園の



高校生と職員がスタディツアーを行い、現地の孤児院（児童養護施設）と交流を深めました。今後もこのような形で、日本の子どもたち、特に施設で生活する子どもたちが現地を訪問し、現地の人と触れ合えることができるようにしていきたいと考えています。先ほどもお話しましたが、施設で生活していると、社会的な経験が不足してしまったり、視野が狭まってしまう、それから自分が生活する環境が周りとは違うんだ、ということで卑屈になってし

もう子どもも多くいます。そうすると、将来、大きくなっていった時に、なかなか自分自身に自信が持てない、「俺はもう別にいいんだ」とか、仕事を始めてもなかなか我慢強く取り組めなくてすぐ辞めてしまい、非行の道に走ってしまうというケースも多くあります。こうした子どもたちが将来、悲観的になる部分を未然に防ぐ一つの方法として、日本とは全く違う環境のカンボジアで貧しくても明るく生活している子どもたちと交流、「自分にもできることがあるんだ」と感じて生きていく力や自信を持たせることが



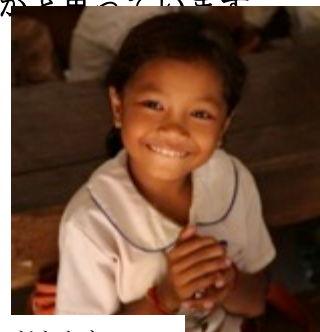
できれば、とても有意義ではないかと思っています。昨日までも2か月、カンボジアに行って、現地の施設と提携ができないかと調査や調整等を行い、帰国したところです。

現役の皆さんも大学生のうちにもいろいろ旅行されたり、視野を広げることは大切だと思います

学園の高校生・職員が田植えの手伝い

ので、もしカンボジアにご興味が

あれば、夏休みでも卒業旅行でも私に声をかけていただければ、案内役となって現地の施設はもとより、アンコールワットのような観光名所もいろいろ紹介できると思います。皆さん自身がいろいろな体験をして、子どもたちや、次の世代にもどんどんと引き継いでいていただけたらいいのではないかと考えています



(写真提供：渡邊 新太氏)

発表3「大学生活を通してボランティア活動を続けてきて」



【パネラー紹介】コーディネーター

それでは最後のパネラーですが、現役の会員を代表して発表をお願いします。経済学部4年の西村綜太郎君です。駒村先生のゼミに所属しておりまして、また、至誠学園の担当でもあるそうです。現在の学園での活動状況やあと数か月で大学を巣立っていくという現在において、ライチウス会への思いなども含めて、現役の立場でお話しをしていただきたいと思います。それでは、よろしくをお願いします。

【発表】西村綜太郎

私は至誠学園でずっと担当ボランティアをやってきました。ライチウス会では代表や副代表といった役職者ではなく、4年間、ヒラの部員として活動を続けてきましたので、今のライチウス会の平均的な学生が4年間ボランティア活動を続けてきて、どういったことを思ったのか、という視点でお聞きいただきたいと思いません。

まず簡単に本日の話の流れについて、ご説明したいと思いません。

最初に、現在のライチウス会の活動形式は昔の形式と違う部分もあるかと思いませんので、私が普段どういった活動をしているのかについて説明したいと思いません。その後に、現役だからこそわかる、今のライチウス会の組織風土について、私個人の考えを説明したいと思いません。その次に、私はライチウス会とは別のボランティア団体で活動してきた経験もありますので、その団体での活動と比較しながら、ライチウス会とはどういった団体なのかとうことをより明確にする伝手(つて)になればと思いません、これについて説明しま

す。最後に、今まで説明したことを踏まえて、今後のライチウス会について提言を二つしたいと考えています。

まず、普段私が至誠学園でどのようにボランティア活動をしているのか、説明したいと思います。私は今、週に1回、至誠学園を訪問し、学園の子どもに対して勉強会という形で学習支援のボランティアを行っています。具体的には、三田のキャンパスで授業が終わった後に、キャンパスから一人で学園まで向かいます。学園では自分の受け持っている子どもに対して家庭教師のように一對一の形式で個別の学習指導を行います。勉強会が終わった後には、また一人で自宅に帰るといふ、個人ボランティアに近い形式で活動を行っています。

私は大学2年の8月から男子児童を受け持ち、2年5か月間継続して、今もその子に教えている状況です。一回の勉強会はだいたい2時間ほどです。ただ、その2時間ずっと勉強をやり続けるのではなくて、普通の勉強を1時間、後は担当している子供の学校の話だったり、彼が好きな漫画の話だったり等の雑談を1時間程行っています。

普段自分がボランティアをするうえで意識していることは、単純に受け持っている子どもの成績を何が何でも向上させてやろうということのみを目的にするのではなくて、彼が何気なく学校で感じたことや、普段話したいことなどを気軽に話せる良き相談相手、“いいお兄さん”という立ち位置でいられればいいと考えて活動しています。

それがメインに行っている活動で、それとは別に年に1回、至誠学園から許可をいただいて、担当している子どもと2人で外出しています。例えば、去年(2014年〈平成26年〉)ですと、立川駅に行ってカラオケをしたり、ショッピングをしたりしました。今年(2015年〈平成27年〉)の11月下旬には、彼に大学のお祭りとはどういったものなのかな?ということを経験してもらおうと思い、三田祭(慶應大学の大学祭)と一緒に出かけました。以上が、今行っている普

段の活動です。

次に、今のライチウス会の組織風土について、どのように感じているのかを説明したいと思います。

いろいろOBの方々のお話を伺い、昔と大きく異なっている点はおそらく二点あると考えています。まず一点目は、現役の会員が現在60数名いますが、ライチウス会とはまた別のサークルと掛け持ちをしており、かつ、別のサークルで精力的に活動して、ライチウス会での活動がサブ的な位置づけという会員がほとんどであるということです。ライチウス会だけに入って精力的に活動されている方が多かった時代とはだいぶ状況が異なっているのではないかと考えています。二点目は、活動形式が個人ボランティアに近いことです。先ほどお話しましたとおり、大学から一人で学園まで行って、受け持っている子供も教えて、そのまま一人で帰るといったように、活動がほとんど個人の中で完結してしまっています。そういう活動を普段続けていると、せっかくライチウス会というサークル集団に所属しているのに、活動が個人の中で完結してしまうのならば集団に所属している意義はどこにあるのだろうか？ということをつまみに考えたりします。そこも、昔とは大きく異なっているところではないかと個人的に感じています。

次に、私が別のボランティア団体で活動した時の話をしたいと思います。私は大学3年の夏休み2か月間、ライチウス会と並行してそのボランティア団体で活動していました。その団体でもライチウス会と同じように学習支援のボランティア活動を行っています。

この団体とライチウス会と大きく異なっているのは、まず子どもの学力向上を重視している度合いです。ライチウス会では先ほど説明したように、受け持つ子どもの成績を何が何でも上げてやろうということをあまり意識することはありません。しかし、その団体は組織全体として子どもの学力向上を重視しており、指導を行う者にも子どもの学力向上を意識付けています。ですから、ボランティアの学生は事前に指導書を団体に提出して、自分で教材も作成すると

いうように、指導前に準備を入念に行っています。そこがライチウス会の活動と大きく異なっている点だと感じました。

二点目は活動の形式が違うことです。この団体では毎週土曜日に地域のボランティアセンターのようなところを借りて、そこに早慶や東大等のいろいろな大学の学生が教師役として集まり、その地域の中学生を対象に、一か所で集団の勉強会を行っています。その集団形式の勉強会という部分が、今は活動が個人ボランティアに近くなっているライチウス会とは大きく異なっている部分だと考えています。その団体の活動の中でライチウス会に取り入れてみるべきだと感じた活動があります。その団体では学習指導が終わり、生徒さんを帰した後に、教師役である大学生が残り、その回の学習指導でうまくいかなかったところと逆にうまくいったところなどを1時間くらいディスカッションし、みんなで指導のノウハウを共有する機会があります。ライチウス会でもこうした機会を取り入れてもいいのではないかと思います。

今までの話を踏まえて、私なりに今後のライチウスについて二つ提言があります。

まず一つは自分の通っている施設ごとに、もっと普段の指導の経験を共有する機会を頻繁に設けてみるべきではないか、ということです。せっかくボランティアという社会的に意義のあることを行っているにも関わらず、今のライチウス会だとそのボランティアの経験が全部個人の中で完結してしまっていて、それは非常にもったいないことだと思います。2か月に1回程度でもいいですから、公式に集まる機会を設けて指導経験等を共有すれば、もっと集団としてのまとまりを増すことができると思いますし、学生ボランティアとしての価値・意義をより発揮できるのではないかと思います。

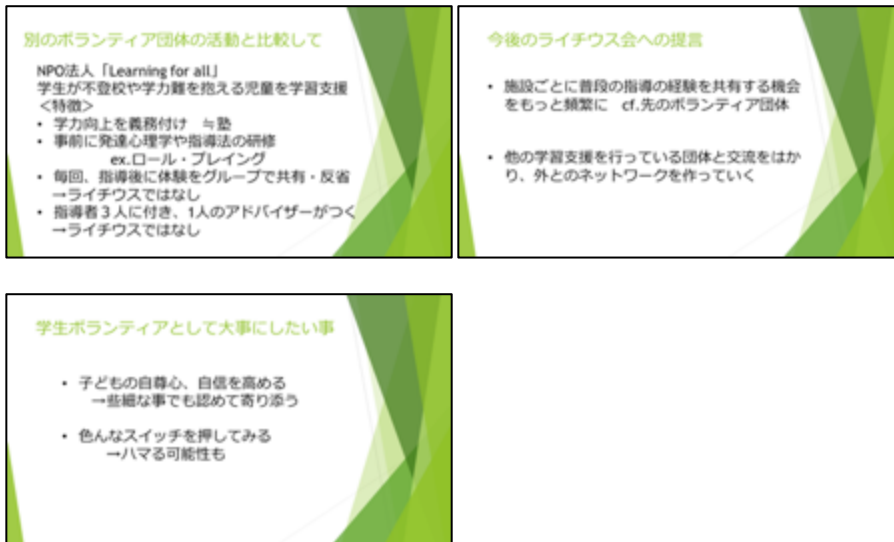
もう一つは、他のボランティア活動を行っている団体と共同で勉強会のようなものを開いて、もう少し外部の団体とのネットワークを作っていくべきではないかと考えています。今、学生の中でもボランティア活動をしている人が多くいます。ライチウス会の会員に

は慶応の学生という縛りがあり、どうしても同じ集団でボランティアをしているだけになっています。ライチウス会をより良くしていくために、ボランティア活動で重視していることが異なっていたり、活動形式が違う外部の他の団体と交流して、これらの団体の良いところをどんどん取り入れていくべきではないかと考えています。

最後になりますが、学生ボランティアとして活動していて、普段担当している子供を教えていくうえで大事にしていることを述べます。それは、担当している子どもの自信・自尊心を高めることを非常に重視して活動することです。彼ができるようになった些細なことであっても、積極的に認めてあげて、寄り添っていくという姿勢を大事にして、今、活動を続けています。

《発表に使用したスライド》

<p style="text-align: center;">大学生活を通して ボランティア活動を続けてきて</p> <p style="text-align: center;">経済学部4年 西村隼太郎</p>	<p>本日の話の流れ</p> <ul style="list-style-type: none"> • 現在のライチウスでの主な活動 • 現在のライチウスの組織風土 • 別のボランティア団体の活動と比較して • 今後のライチウス会への提言 • 学生ボランティアとして大事にしたい事
<p>現在のライチウスでの主な活動</p> <p><勉強会></p> <ul style="list-style-type: none"> • 家庭教師のような形で1対1で指導 • 同じ男子児童と2年5ヶ月継続中 • 勉強：雑談=1：1 →学力向上<良き相談相手 <p><外出活動></p> <ul style="list-style-type: none"> • 担当児童と2人で年に1回外出 ex.立川駅、三田寮 	<p>現在のライチウスの組織風土</p> <ul style="list-style-type: none"> • 殆どの部員が他サークルとの掛け持ち →ライチウスはサブ位置づけの部員が多い cf.昔のライチウス • 個人ボランティアに近い →サークルという集団で活動している意義？



【質問】

最後のスライドに「色んなスイッチを押してみる」とありますが、これを説明してください。

【説明】

受け持っている子どもが何かのきっかけで、自分の人生に対して今まで以上に主体的になったり、将来就きたい職業が明確になったりして欲しいと思っているので、彼に色々な体験をしてもらいたいという意味で「色んなスイッチを押してみる」という表現を使っています。例えば、外出活動で三田祭を彼と2人で訪問した時に、大学のお祭りの雰囲気を見て彼自身が大学に行ってみたいな、と考えるようになり、普段の勉強に自らより熱心に取り組めるようになればいいなと思っています。自分が当たり前だと思っている環境や些細なことも、彼にとっては新鮮だったり、魅力的だったりして、モチベーションを大きく引き出すきっかけになることもあるのではないかと考えています。

質 疑 応 答 等
 進行：コーディネーター佐藤 頁一

【佐藤】

お三方に発表していただきましたが、特に今の西村さんの発表では、OBの方々、とりわけ、割とオールドOBの方々は「今のライチはこんな風になっているんだ」と驚かれた方もいらっしゃるのではないかと思います。

逆に現役の学生には、4年生の西村君の立場でいろいろ活動を通じて感じたことを率直にお話いただいて、後を引き継いでいく学生さんたちには参考になったことではないかとこちらで聴いていて思いました。ありがとうございました。

それではここで、パネラーの皆さん相互の質問や意見、ご自身の発表の補足説明等をしていただければと思います。

【半田】

西村さんの発表を伺いながら、「ああ本当にそうなんだな」と改めて、佐藤先輩と同じ気持ちを今、持っているところです。

私たちの時代は、なんというかボランティアという活動そのものが、そんなに広くある時代ではなかったこともあるのか、学生運動の時代も並行していたこともあるのかかもしれませんが、割合に絆が強くて、例えば日吉とか矢上台の工学部の方とかも月に1回か（回数は忘れましたが）は三田に集合して勉強会をしたりしました。共通テーマで児童養護とか福祉に関係する、例えば誰かが何か本を読んだとしたら、それについて発表するとか、ディスカッションがあったり、あるいはすごく笑っちゃうような内容でもあったりします。時にはすごく真面目な文章も綴られている「文集」というのがあって、それを年に3回くらい、部室でガリ版刷りで作っていました。そういう意味ではすごく誰がどんなことを考えてやっていたのか、すごくわかりやすい組織体だったと思っています。今はそういうことを実現するのが難しい時代になったのでしょうか？

【西村】

そうですね。うーん、勧誘の段階で、今は「ボランティアを積極

的にやりましょう」というように勧誘をしているのではなく、「他のサークルとの掛け持ちがし易いです」ということを押し出して勧誘していますので、昔行われていたように、月に1回三田に集まって勉強会をやったり、もっとボランティアとしての活動を向上させて行こうという働きかけを行ったとして、「果たしてどれくらいの会員が応じてくれるのかな？」という思いは常々抱いてきたので、個人的には今のライチウス会の現役学生が抱えている目的意識のままでは難しいと思います。

また、誰がどんなことを考えて活動しているかということに関しても、先程説明したように普通のボランティアの活動が個人の中で完結してしまっているのも、今の活動形式のままでは把握するのは容易ではないと思います。

そうですね。うーん、勧誘の段階で、今は「ボランティアを積極的にやりましょう」みたいな形で勧誘をしているのではなくて、どちらかと言うと「他のサークルとの兼用し易いです」ということを押し出して勧誘していますので、昔行われていたみたいに、月に1回三田に集まって輪読会をやったり、もっとボランティアとしての活動を向上させて行こうということに、部員が応じてくれるのかな？という思いがします。

【渡邊】

私が至誠学園に勉強会で行っていた頃は、週に2日勉強会の曜日が設定されていて、そのどちらかで来てくださいとう風に学生に呼びかけられていました。勉強会が終わった後は職員が入って報告・相談の場を設け、「こんな経験がありました」「こんな時どうしたらよいですか？」ということなどを話し合ったり、困った時にも職員にフォローしてもらったりしていました。

ただ、勉強会に来られる学生の数が増えると「この曜日は授業があるので来られない」とかいろいろなケースがあるため、どうしたら学生さんに負担のない形で実施ができるのか考えたりしました。至誠学園では子どもたちの生活形式も集団生活から家庭に近い小さ

なユニットでの生活に変わってきていますので、現在は、各ユニットの担当職員と子どもとボランティアで話し合い、予定を決めてやっていたり形で進めてもらっています。

【佐藤】

今の学生はけっこう授業に出なければいけないのですね？

我々の時は先生方もちゃらんぼらんでしたけれども、学生はもっとちゃらんぼらんで、しかも、私の場合、大学4年間で3年間は学生運動の影響でバリケード封鎖などがあったため、半年くらい授業がなかったりしていました。今の学生は一生懸命勉強をされますので、みんなでそれこそサークルを作って活動するみたいなことは少し逆風なのかもしれませんね。他にいかがでございましょうか。

【半田】

先ほどちょっと時間がなくてご報告できなかったのですが、「夢のみずうみ村」という形でとてもユニークな、そして、今、社会でも注目をあびているデイサービスの理念から実践まで創りあげたのは、ライチウス会の先輩で作業療法士の藤原茂さん（社会福祉法人夢のみずうみ村理事長）なのです。藤原さんは経済学部を中退し、至誠学園の指導員になりました。その後、作業療法士の資格を取得し。故郷の山口でリハビリの仕事に従事。そして、その経験を踏まえ、「夢のみずうみ村」を創設した方です。数年前にNHKの「プロフェッショナル—仕事の流儀」で紹介されて以来、マスメディア等にもより一層取り上げられることになりました。来年（2016年〈平成28年〉）1月4日に放映される10周年記念の同番組ではこれまで取りあげた人の中から何人か選んで放映するそうですが、藤原さんも選ばれました。そういう先輩がライチウス会にいたことを覚えていてほしいと思います。

【佐藤】

さて、残り時間もだいぶ少なくなってまいりました。せっかくの機会ですから、ここで会場の方から、パネラーへの質問や意見、提言あるいはOBから現役へのエールでもけっこうですので発言いた

だき、話題を共有したいと思います。いかがでございましょう？

【質問①：大学４年・現役】

半田さんに質問したいのですけれどもよろしいでしょうか？先ほどの言語聴覚士のお話で、最初に専門職員課程を終えられた時期では、やはり言語訓練といったものは知名度が低く、パイオニアとしてかなりご苦労があったのではないかというよう

に思います。そうした中で、例えば障害があっても、そういった支援があることを知らない方や声をあげて障害があることを言えない方たちを支援していくために、どのようなことをしてきたのかを教えてくださいたいのです。

【半田】

まさにコミュニケーションに障害のある方なので、いろいろな想いを、意見をご自分から発することができないわけですよ。したがって、世田谷にはST（スピーチセラピスト）がたった私一人しかいなかった時代が何年もあるのですが、地域の福祉事務所や福祉系の方々、あるいは医療系の方々、あるいはヘルパーさんなど多くの方との勉強会の中で、STとはどんな仕事なのかをあちこちでお話をして回りました。また、いろいろな保健所で開催されたリハビリ教室（今はそういう活動はないのですが）に協力して、保健所の保健師や訪問介護士と一緒に、手を差し伸べていきました。

それまでは、STが社会で認知されていませんでしたので、そのリハビリを必要としている方々になんの手立てもなされていないという状況が長く続きました。そうすると、地域にそういう音声難の障害のある方々が在宅に閉じこもったままになっています。そこをどうやって救うか、ということを本当に、きれいごとではない、すごくいろいろなことに取り組み、地域を耕してきたかなと思っています。

【発言①：1965年（昭和40年）卒・OB】

私もライチウス会を出てから、専門の方へ進みまして福祉の仕事はずっとやってきました。たぶん、ライチウス会を出てからいろい

ろな福祉現場や医療や教育の現場に入っている方がずいぶん多くなっていますが、僕と金子保（現・淑徳大学名誉教授）がその走りかな。調べますともう一人、長房の保育園の園長になった方がいるという風な話を聞いていますが、私はお会いしたことはありません。

それでさっき西村さんがおっしゃった組織化の話ですが、私は40年卒なんです、その前くらいにライチウス会が全国の大学にアンケート用紙を配って、学生ボランティアの実態について調べたという記録がありました。そういう意味でいうならば、やっぱり何かの形で組織化をしていくのがいいのか、今はもう、そういう時代ではないのか。特に阪神淡路大震災の時からボランティアのあり方というのはどんどん変わっていますから、あんまり調査をやってもしょうがないのかなという感じもします。いわゆる児童養護施設というような所に絞ってやるならば、一つの意味はあるのではないかと思います。私は今、ボランティア活動を続けていて、さっき西村さんがおっしゃっていたように、いわゆるそれぞれの現場にはボランティアが集まりますが、全体をまとめるような役割をすることでなかなか人が集まらないというか、中心になって引っぱっていくようなところが育って行かないという悩みがあります。そういう意味でいうならば、その辺のところまで今後掘り下げて、いい点・悪い点を出していくと、意味のあるものになっていくかなあ、というような気がしました。

【佐藤】

ありがとうございました。大先輩からのご提言です。ぜひ参考にさせていただければと思います。

他にいかがでしょうか？

【質問②：1958年（昭和33年）卒・OB】

普通の家庭の主婦でございます。私は、ライチウス会で育てていただいたボランティアの精神を、子育ての時は中断しましたが、その後、何かお役に立つことと思ってやってまいりまして、この10年間は路上で暮す方々や、それから生活保護の方々への炊き出しを

四ツ谷の教会で一週間に 200 人程度、山谷で 500 人程度、そういう炊き出しの仕事をしています。その人達と仲良くなって、一緒にお風呂に入ったり、話し合いをしていますと、その人たちの子どもの時代や青年時代に、育ちの面で問題があったのではないかと思うようになりました。

施設で育っている子どもたちは、昔と違って今は大変恵まれているし、学習指導も受けられていると思うのですが、精神面というのでしょうか？達成感を得るとか、非常に情操的に豊かな教育を受けるとか、そういう点で渡邊さんはどのような工夫をされていますか？

【渡邊】

子どもたちは物質的には昔と比べて非常に豊かになっていると思いますが、物があっても本当に満たされているという気持ちが、現状ではなかなか得られていないのかと思います。先ほどもお話ししましたが、施設にいてどうしても卑屈になってしまう。クラスの同級生が普通に得られる家庭での愛情が満足に得られないということが、施設で生活する子どもたちの大きな不満であると思います。なので、私たち職員は自分達の伝えられるものをたくさん伝えるとともに、それから子どもの気持ちをしっかりと汲みとっていきます。問題行動といわれるような形で感情を表現してしまう子どもたちが多いのですが、そういった子どもたちに対して、それがどうしてそういった態度になってしまうのか？というところを、表面上の出来事だけを対応するのではなく、根本を考えて対応することが非常に大切であると思っています。

それと合わせて、ライチウス会の皆さんのようないろいろな立場の人が、「たくさんの人があなたに関わってくれているんだよ」、「あなたを見守っているんだよ」ということを口に出して伝えることもすごく大きなことだと思っています。私たちが、子ども自身が気づかない部分を気づかせてあげるきっかけを作ることがとても大事です。

【発言②：ライチウス会前会長・秋山豊子氏】

西村君の発表で、OBの方にも現役の方にもちょっと一言ずつ申しあげたいと思います。

西村君の話でライチウス会のかかなりの学生はメインではなくてサブ的な活動であるというようなことで、「なんだい、そうなのかあ」と、ちょっとがっかりされたOBの方もおられるかもしれませんが、今、ボランティア活動というのは、大学に来るまでにいろいろ経験していますよね。週一回ですとか月一回ですとか、そういう形でもボランティアという形でやってきている。つまり、かなり経験をしてきている、と思います。大学に入ってきた時もボランティア活動に「すっ」と入ってきます。全てをなげうって、その後就職もして、住みこんで、という形もあるかもしれませんが、今の大学生の方たちは、多様な価値観を持って自分の生活も楽しみつつ、でもできる範囲で無理なく、でもごく自然にやろうとしているという風にとらえていただけるとありがたいと思います。

ですから、いろいろな形があるかもしれませんが、夜、立川まで行って、あるいは、女の子が夜遅くまで活動をすることは決して楽なことではないのです。決して簡単でもないですね。サブ的といっても、いい加減にやっているわけでもないのです。非常に熱心にやっています。ですから、「サブなのかあ」とちょっと気落ちされたOBの方もおられるかもしれませんが、それは認めていただいて、自分の生活の中で無理なく自然に、しかも安定的に、しかも熱心にやっているのだということにとらえていただきたいと思います。ちょっと一言、もし誤解があれば、ということで申しあげました。

ただ現役の人たちには、先ほど西村君が言ったことは、私もこれまで何度も言ってきたことですが、一人一人の活動になりがちです。やっぱりみんなで情報を共有して欲しい、悩みがあったらお互いに相談しあう場を作って欲しい、というような事を総会とかいろいろな機会に伝えてきました。

そこで、やっぱり活動は発展させていけるかなあと思いますし、

三田祭の時ですとか、春夏の合宿の時ですとか、そういう時に全体活動の中でそういう勉強をする、あるいは情報共有する時間を作ってもらって、高めていってもらおうというようなことも可能かなと思います。非常に良い機会に、西村君はいろいろ問題提起してくれましたので、この機会に皆さん、そういう事も考えて発展してもらえればなあと思います。

【発言③：ライチウス会会長・駒村康平氏】

西村君の問題提起は新しい環境の中で、ライチウス会の活動を今後どうするか？という非常に重要な提案をされたと思います。

ライチウス会の伝統と文化を引き継ぎながら、新しい役割も考えなければいけない。ライチウス会の持つ価値、共有している価値がいったいどういうものなのか？そして、それをどう今後発展させるのか？ということを考えていかなければいけないなあ、と思いました。

歴代の会長が自主的なこの会にどのように関わってきたかということは、これから勉強させていただきたいと思いますが、一つのキーワードは、先ほども西村君が話した団体活動とネットワークをどうするか、という話だと思います。もう一つのキーワードは、高橋先生が先ほどおっしゃった「自分だけでなく、周りも変える」という意味で、ライチウス会の活動があるんじゃないかと思います。現役の学生や前会長等とも相談して、あとはOBの皆さまからもライチウス会の価値は「こういう価値なんだ、こういう伝統なんだ、こういうのも出してもらいたい」とお言葉をいただいて、今後ますます100年に向けて発展させていきたいと思います。よろしく願いいたします。

【佐藤】

秋山先生と駒村先生に大変上手にまとめていただきました。このパネルディスカッションを是非とも現役の学生諸君の今後の活動の参考にしていただきたいと思います。そしてOBの方々にはご自身の現役時代の活動と照らし合わせまして、今のライチウス会の活動

の現状とその背景にあるものをご理解いただければさいわいです。
それではこれもちましてパネルディスカッションを終了します。
どうもありがとうございました。



本冊子はHP掲載講演録を関係者配布用として印刷したものです
平成27年12月12日開催 ライチウス会勉強会
パネルディスカッション講演録

編集 : 栗和田敏 餘吾徳造 矢部文彦 稲見空広

掲載HP 慶應義塾大学ライチウス会

<http://raitlius.com/>

慶應義塾大学ライチウス三田会

<http://raitlius-ob.com/>